

kiss once again

プロローグ

ただ今深夜一時。本日、一月二十四日は私の二十九歳の誕生日だ。

この歳になれば別段、誕生日はめでたくないし、嬉しいものでもない。

だが、まさかこんな気持ちで誕生日を迎えることになるなんて思っていなかった。

ソファに体育座りしてクッションを抱える。私の目には、くつきりと陽性反応を示している妊娠検査薬が映っていた。

はあ〜と大きな溜息を一つ零す。

何度見ても現実が変わらない。

まあ、やることやれば妊娠もするだろうけど。なんで、よりによってあの男の子どもを妊娠するか。

子どもの父親であるあの男の無駄に端整な顔を思い出して、余計に気が滅入ってきた。

ぐしやりと前髪をかきあげ、抱えていたクッションに顔を埋める。

どうするよ、私？

正直、まだ自分が妊娠しているという実感はない。

クッションの下にある下腹部はぺったんこ。そこに新しい命が宿^{やど}っているなんて信じられなかった。

生理が一ヶ月以上遅れていても、それだけならストレスで遅れているのかと思っていられる。だけれど、悲しいことに心当たりがぼつちりとあった。

だから、念のために仕事帰りに妊娠検査薬を薬局で買ったのだ。

まさか、そんなはずはない。だって、たった一夜の過^{あやま}ち——と思いつながらも。

なんだかあの一夜は、ここ数年、ご無沙汰^{ぶさた}だった分を取り戻すような勢いであの男に攻められた気がするが、それは横に置いておく。普段は無口で鉄仮面な上司が、ベッドの上ではまるで別人だったことも。

妊娠検査薬の反応が出るまでの間、私はまるで祈るような気持ちで待った。

しかし、結果は見事、惨敗^{ざんぱい}……

はつきり、くつきり陽性^{やうせい}反応が現れた。

しかも判定時間の三分を待つまでもなく、あまりに綺麗に出てきたのだ。さすが、あの男の子ども、どれだけ自己主張が強いんだ。……と妙な納得をしたあと、急に現実が襲ってきた。

私、真崎茜^{まさきあかね}、二十九歳、独身。

クロフォード・ジャパンという大手総合商社で、営業二課主任として勤務中。

見た目は絶世の美女でもなければ、不細工でもない。

十人いたら三人は美人と言ってくれるような容姿。緩やかなウェーブを描いた肩先までのダークブラウンの髪に、少し吊り上がり気味の薄茶のアーモンドアイ。そのせいか、よく猫科の動物にたとえられる。

二十四歳の時の恋愛を機^きに、もう恋なんてしないとずっと仕事一筋で生きてきた。

営業成績は常にトップクラスをキープ。外資系ならではの実力主義の会社ゆえ、正当な評価が下り、二十八歳で女だてらに営業二課の主任に抜擢^{たくわく}された。

だから、このままずっと誰にも頼らずに、仕事一筋で生きていくと決めていた。

なのに、たいしてめでたくもない二十九歳の誕生日を迎える今日。

職場でも有名な、喧嘩^{けんか}ばかりしている上司の子どもを妊娠しているという事実が判明しました。

……どうするよ？ 私。

1

そもそもの事の起こりは約二ヶ月前の金曜日。

街の中が徐々にクリスマスへ向かい、彩^{いろど}りを増していた時期だった。

その日、茜たちが所属する営業二課の面々は、とある居酒屋で祝杯を重ねていた。数ヶ月かけてチームを組んで行っていたプロジェクトが成功したのだ。

翌日は休みなことと、うまくいけば億単位の利益も見込めるとあって、皆がハイテンションになっていた。

茜自身もすぐくテンションが上がっていた。祝賀会を兼ねた飲み会で、注がれるままにいつも以上のペースで飲んでいた自覚はある。

自分がどれほど飲んだのか、わからなくなっていた。要するに、その時の茜はかなり酔っていた。普段なら、記憶を失くすほど飲むことなんてない。酒に弱いわけでもない。大きな仕事の成功に、気分が高揚していたのだろう。

だから、なんで今こんな状況にあるのかわからない。

今は二次会の終わりなのか、三次会の終わりなのか。

気づけば、いつも喧嘩ばかりしている上司の鉄仮面みたいな顔が、目の前にあった。薄暗い路地でなぜか二人は抱き合っていた。上司の肩越しにクリスマスカラーに染まるネオンが瞬いている。

何……？

状況を理解できないまま、酔った頭でぼんやりと上司の——桂木政秀の端正な顔を眺めた。

綺麗な顔をした男だとは思っていた。高い鼻梁に、切れ長の黒い瞳。まるで、鍛え抜かれた真剣のような静謐な雰囲気を持っている。三十二歳、独身。茜の直属の上司だ。

その見た目で、社内の女性たちのハートを鷲掴みにしている。だが、浮わついていた噂もなく年齢に

見合わない落ち着きのある所作と存在感で淡々と仕事をこなし、社内でも高い評価を受けている。

実際にこの男はかなり仕事ができる。今回のプロジェクトの成功もこの男の働きが大きかったことを、補佐役として参加していた茜は知っていた。

茜はどういうわけかこの上司と仕事で意見がよく対立する。ほとんど表情を変えず、自分のペースで仕事を行う桂木に、茜はなぜか無性に闘争心をかき立てられるのだ。たぶん、反りが合わないのだろう。

自分とは違う意見でも使えろと判断すれば、受け入れる度量がある人なので、茜がたてついても柳に風とばかりに受け流してしまう。それも反りの合わない理由の一つなのだろう。

その上司にまるでキスする寸前のように力強い腕で腰を抱き締められ、顔を覗き込まれている今の状況が理解できない。寸前の記憶が酷く曖昧だった。

この男の顔はやっぱ綺麗だなと見当違いなことを思いながら、ふいにこの状況に異様さを覚えた。

酔った部下を支えてくれているにしては近すぎる距離にぎよつとして、もがくように体を離そうとしたが、腰に回された腕にそれを阻まれる。

一体なんなんだ、と自分を拘束する男を見上げると、桂木の黒い瞳と目が合う。

切れ長の瞳の中に、熱く燦る熱を見た。その瞬間、どくりと心臓が脈打つ。

あきらかに情欲を孕んだ瞳に、戸惑いとともに茜の体の奥は甘く激しく疼く。

しばらく忘れていた女としての自分が、桂木の瞳によって揺り起こされた気がした。

数センチの距離から黒い瞳で窺われて、視線を離すことができない。心の奥まで見透かすような強い眼差しに、呼吸が、鼓動が、乱れる。

——この男に触れてみたい。強烈なまでの衝動を覚えた。

二人の間の時間が止まって、緊張を孕んだ時間が過ぎる。大通りで、クラクシオンが鳴った。それが合図だった。

どちらが、先に動いたのかわからない。たぶん、ほとんど同時に動いていた。引き寄せたのか。引き寄せられたのか。

端正な男の顔が近づいてきて、瞼が自然と閉じた。熱い吐息が、ルージユを塗った茜の唇をかすめ、心臓がびりびりと震える。

触れる唇。混ざり合う吐息に熱が上がった。

「……ん……んん……！」

うつすらと開いていた茜の唇に、桂木の舌が入り込む。柔らかく濡れた感触が、淫猥な動きで茜の口腔内を動き回る。深く唇を触れ合わせ、角度を変え、舌を絡めたまま強引なキスをされる。

キスの仕方なんて、何年も忘れていた。

息がうまく継げずに乱れる呼吸ごと、桂木に奪われた。

背筋を駆け上がる純度の高い熱に、体から力が抜ける。広く逞しい背中に腕を回し、体を桂木に預ける。腰に回された彼の力強い腕が、二人の距離をゼロにする。

アルコールとキスに酔った頭の片隅で、どこか冷静な自分が今の状況に疑問を投げかける。

なんでキスするの？ でも、気持ちいい。キスってこんなに気持ちよかったっけ？

どれくらいの間だったのか、ようやく解放された時には、体の力が抜けきっていた。互いに息が上がっている。

離れていく唇をぼんやりと見つめながら、疑問が口から零れた。

「……なんで……キス……？」

間近で見上げる桂木は、散々人を翻弄したくせに、相変わらず鉄仮面みたいに表情が変わらない。なんだか負けた気がして腹が立った。

こっちは支えてもらわないと立ってられないのに。どんなことでもこの男に負けるのは嫌だった。

ムカついて黒い瞳を覗き込むと、妖しい光を放つ眼差しは、明らかに茜を欲しがっていた。

煽られたのは茜だけではない。仕掛けた本人の桂木も情欲に煽られていることに気づいて、溜飲が下がる思いがした。

「……嫌か？」

視線を逸らさず、桂木が濡れた声で問い掛けてくる。質問に質問を返されてムツとしたが、別にキスは嫌じゃなかった。

むしろ触れた唇も、腰を抱いた腕の力強さも、絡めた舌の甘さも何もかも心地よかった。

桂木の瞳の中に映る自分は女の顔をしていた。普段の男勝りな自分とは違う女の顔。

久しぶりに自分がただの女であることを思い出した。それを思い出させたのが、いつも喧嘩ばか

りしているこの上司だったのが不思議だった。

「真崎？」

無言の茜に、答えを促すように桂木が自分の名を呼ぶ。その声を聞いて、理性より先に本能が答えを出した。

桂木の首に腕を回して引き寄せ、自分からキスをする。

一瞬、驚きに桂木が目を瞠つたのに気づき、してやったりと笑う。

しかし、すぐに主導権は桂木に奪われる。

ん、やっぱりキスうまいな。

「……ん……ふん……」

絡めた舌が濡れた音を立て、喘ぐ呼吸さえも奪われて、くらくらと眩暈にも似た感覚を覚えた。桂木の頭を抱きかかえ、髪の毛の生え際に指を入れて髪を梳く。指の間を通り抜けていく少し硬い髪の毛の感触。綺麗に整えられていたそれを乱す。

桂木の指先も、意図を持って茜の体の上を淫らに這う。

太ももに桂木の熱が触れた。そのことに自分でもびっくりするほど興奮してしまう。

「どうする？ どこか入るか？」

だから一度目よりも短いキスの終わりに耳元で囁かれた言葉に、茜は無言で同意した。

そして、二人は夜のネオン街のホテルになだれ込んだ。

二人でベッドに倒れ込む。安っぽいラブホテルの大きなベッドは、二人分の体重を受けて、ギリと軋んだ。

「んん……っ」

キスがやめられない。何度も繰り返されるキスが気持ち良かった。

この男のキスは腰にくる。口腔内を好き勝手に動き回る桂木の舌に翻弄され、甘い疼きが体を濡らした。キスを続けながらも、互いの体をまさぐり、服を脱がしていく。

たっぷりと互いの唇を堪能し身を離すと、二人の間に透明な糸が光った。

腰の奥がじんじんと疼く。欲情に肌が火照り、体が赤く染まっているのが自分でもわかった。

息を上げながら、潤んだ瞳で見上げた先には、普段の無表情からは想像もできないほど欲情に染まった雄の顔をした桂木がいた。

こんな顔もできるのか、と意外な表情に鼓動が乱れる。

昔、この鉄仮面男は一体どんな顔をして女を口説くのだろうと思ったことがあったが、まさか、キスと眼力だけだったとは。

自分の顔とテクニクに自信がなかったら、こんな芸当はできないだろうなと思う。そこらにいる男がこんなマネをしたら、ただのセクハラか、痴漢だ。

まあ、桂木のキスと眼力に落とされた自分がどうこう言える立場ではないが。

ただ、顔のいい人間は得だなと茜は妙なところで納得した。

それにしても、まさかかつての疑問を、自分が明らかにすることになるなんて、人生は意外なこ

とに満ちていて面白い。そう思ったら、なんだか醋く笑えた。

「何がおかしい？」

くすくすと笑う茜に、上にいる桂木が不審そうに問う。

この状況すべてがおかしいだろう。いつもは喧嘩ばかりしている相手に、突然のキスと眼力だけで落とされた事実も、そんな相手にこんなにも欲情している事実も、何もかもがおかしい。だから余計に、笑いが止まらなくなる。

冷静なつもりでいたが、茜はまだまだ酔っていた。

「その気がないならやめるか？」

いつまでも返事をせずに笑い続ける茜に、桂木が言った。茜の額の髪の生え際あたりに、桂木の男性にしては綺麗な指が差し込まれ、前髪をかき上げられる。愛撫みたいな優しい指使いが気持ち良くて、茜は猫のように目を細める。

ようやく笑いが収まり、茜は改めて自分に覆いかぶさっている桂木を見つめた。

見上げた桂木は先ほどまでの欲情に染まった雄の顔ではなく、普段の鉄仮面に戻っていた。だが、すぐ傍にある漆黒の瞳は、その表情よりもよほど雄弁に自らの感情を物語っていた。

言葉ではやめるかと問いつながら、その瞳の中にあるのは、どこまでも純粋な情欲という名の熱。それに茜の太ももには、先ほどからずっと桂木の昂ぶりが触れている。

「やめられるの？」

太ももを動かして、桂木の昂ぶりを刺激すると、不機嫌そうに眉間に皺を寄せたが、触れている

熱はその質量を増した。

「別に無理強いたいわけじゃない」

無理強いつて。今さら、何を言ってるんだこの男は。

酔っぱらっている部下に突然キスを仕掛けて、その気にさせた男の言葉じゃないだろう。酔って流されている自覚はあるが、ここにいるのは茜の意志だ。別に無理強いされたなんて思っていない。

互いにいい大人だ。合意の上での行為に、あとでぐだぐだ言うつもりも、責任を取れと言うつもりもない。

この状況で、突然笑ったことは悪かったと思うが、だからって嫌がっているわけじゃない。

なのに、本気でやめる気なのだろうか。桂木が起き上がろうとしたので、茜は無性に腹が立つ。

茜の太ももに触れていた熱は確かな質量を持っていたのに、こちらの気持ちも確認もせずに大人の顔をして今さらやめるなんてありえないだろう。

第一、すっかり忘れ去っていた女としての自分を目覚めさせ、その気にさせた責任はどうしてくれる！

ゆっくりと起き上がった茜は、落ちてきた前髪をかき上げる。桂木はベッドサイドに腰掛け、乱れたネクタイを直していた。

「もう終電もないだろう。泊まっていく」

「桂木さん」

話している桂木を遮って呼びかける。

「何だ？」

こちらを振り向いた瞬間、桂木のネクタイをぐいっと引き寄せる。

「誰もやる気がないなんて、一言も言っていないでしょうが」

吐息が触れ合う距離で囁いて、強引にキスをする。

瞳は閉じなかった。挑発するように桂木の黒い瞳から目を離さない。

五年以上一緒に仕事をしているが、今日だけで桂木の色々な顔を見た気がした。普段は鉄仮面みたいに表情を変えない上司が、プライベートでは案外、感情を顔に出すなんて知らなかった。

今は茜にキスをされながら、まるでご馳走を前にして待てと言われた獣のような、ものすごく不機嫌そうな顔している。

「……んん……」

なのに、桂木のキスはやっぱり、巧みだった。差し入れていた舌を押し戻され、逆に桂木の舌が茜の口内に侵入してくる。口蓋を舐め上げられ、舌を甘噛みされ、自分でも聞いたこともない甘い声が漏れる。

気持ち良さに一瞬、我を忘れそうになった。もしキスの相性なんてものがあるとしたら、桂木との相性は最高だと思う。性格の相性は最悪なのに、キスの相性は最高なんておかしいものだ。

そう思った瞬間、桂木は唇を離した。

「真崎、おまえな、酔ってるだろう？」

ものすごく不機嫌な顔をしたまま桂木が言った。

「酔ってるわよ？ でもそれが何？ わかって仕掛けてきたのはそっちでしょ」

桂木のネクタイを掴んだまま、端正な顔を睨み付け、茜は鼻で笑ってやる。

やっぱり、自分たちの性格の相性は最悪だ。互いに合意の上でここにいるはずなのに、なんで今さら、する、しないで採めなきやいけないのだ。

「つたく。せつかく人が今日は見逃してやろうと思ったのに、台無しにしゃがって。もうやめてやれないぞ」

桂木は舌打ちまじりに苛立ったような声を発し、またもや茜をベッドに押し倒す。

「だから最初から、やめてくれなんて言っていないわよ」

再び覆いかぶさってきた桂木から視線を逸らさずに挑発的に言ってから、ふと桂木の言葉の中に、何かおかしな単語が混ざっていたことに気づく。

ん？ 今日？ ってどういうこと？

桂木は「だったら、手加減はなしだ」と唸るような声を出し、茜の首筋に噛み付いた。甘い刺激に茜の疑問は一瞬のうちに霧散した。

そして、茜は自分が起こしてはいけない猛獣を起こしてしまったことを、身をもって知ることになる。

手際良く、乱れていたスーツと下着を脱がされ、同じくスーツを脱いだ桂木の体の下に敷かれる。久しぶりに直に触れた男の肌は驚くほど、熱かった。

そのことに戸惑う暇もないほどに、桂木の唇と指先が首筋、胸元に触れ、茜の体温は上がった。

肌に触れる桂木の吐息は火傷しそうなくらい熱い。かつ、長く器用な指先が茜の感じる部分を見つけては、執拗なほどに触れてくるから、もうわけがわからなくなる。胸の頂き、淡く色づく乳首を甘噛みされ、さらに舌で舐られる。

「……あ、あ、んん……っ！」

体が、熱くて、熱くて、仕方なかった。

蕩けるような快楽が背筋を駆け上がってくる。

何よりも時々与えられる桂木のキスが、茜を翻弄した。

なんで、この男はこんなにキスがうまいんだろう？　こんなに、甘くて、淫らなキス、私は知らない。

キスだけで簡単に翻弄されている自分を悔しいと思っても、どうすることもできない。

普段は整えている前髪が額にかかって、汗で張り付いていた。形の良い眉は苦しげに歪み、切れ長の黒い瞳は、艶を含んで濡れている。

男の色気をたたえた容貌に、体の奥が疼いて仕方なかった。

その顔をもっと見ていたい。

「……か……っ……っ……さ……ん！」

疼く体の奥を、濡れた指が探ってくる。しばらく誰にも触れさせることのなかったそこは、濡れていたにもかかわらず、一瞬だけ桂木の指先を拒むようにひきつれた。

「んん！」

思わずぎゅっと目を瞑って、桂木の肩に額を押し付ける。

「大丈夫か？」

耳元で桂木が囁く。その声に無言で頷けば、くすりと笑われた。

なぜ笑われたのかわからず瞼を開けたが、すぐに後悔する。

桂木は、まるで獲物を見つけた獣のようで、そのうえ凄まじい色気を放っていた。

これからの行為を考えると、今は絶対に見たくなかった悪辣な表情だった。

思わずびくりと体を震わせた茜に、桂木は目を細めて笑うと、耳を舐め上げて囁く。

「そんな処女みたいな反応をされたら、歯止めがきかなくなりそうだ」

こんな時になんてことを囁いてくれるのだ。この男は！

快楽に酔っていた頭が、一瞬で冷静さを取り戻す。

「別にそんなに怯えなくても、酷いことはしないから安心しろ」

いや、もうその表情だけで、十分酷いから！

その顔を見ただけで犯された気分だ。普段とのギャップがありすぎる。

「だから、その反応は逆効果……」

本気で涙目になってビクつく茜の首筋に、桂木はきつく吸いついてくる。強く吸われたせいで、赤い花が茜の首筋に咲いた。

「せつかく見逃してやろうと思ったのに、煽ったのは真崎だ」

そうですね。数分前の自分、なんて馬鹿なことをした！　だが後悔してももう遅い。

茜があまりに怯えていたからか、桂木は苦笑してまたキスをしてくる。そのキスに、怯えていた心が解される。キスの間に桂木の長い指が、茜の体の奥にゆっくりと差し入れられた。

「んんっ」

茜の震える体をなだめるように、何度も甘いキスが降り注いだ。初めは浅く探るように動いていた指先が、奥に入り込む。

そして、茜の感じる部分を探し当てては、執拗にそこに触れ、同時に快楽に敏感になった芽を擦る。体の奥が濡れて、愛液が溢れていくのが自分でもわかった。

桂木を受け入れるために蕩けて、ぬかるんでいく場所から広がる快感に背筋が震える。久しぶりに味わう快楽に、自分が自分で無くなるような心細さを覚えて、茜は桂木の背中に腕を回して縋りついた。

「あ、あ……や、やあ……」

溢れた愛液が太ももを伝い、シーツを濡らす。その頃にはもう目の前が赤く染まって、何も考えられなくなっていた。

本能のままに桂木の指の動きに合わせて腰が揺れ、中の指を締め付けてしまう。上り詰める寸前でわざと快感を逸らすみたいに、指の動きがゆっくりしたものになり変わり、茜はイケない苦痛に涙を滲ませた。

「う、んん。もう……やあ……だ……め」

思わず、自分から桂木にねだりたくなる。

「何が？」

指だけでは我慢できなくなっていることをわかっているくせに、そんなことを囁いてくるなんて最悪だ。余裕のそぶりで問いかける男は、指の動きを速めてきた。

桂木は、感じるところをわざと引つかくようにばらばらに動かしたかと思えば、まとめた指を押し付けるように根元まで差し入れる。快楽に涙が溢れて止まらなくなる。

「……ド……Sっ！」

涙で濡れた瞳で睨み付けると、桂木が笑った。

「かもな。意地を張っている真崎を見ると、突き落としたくなる」

「……サ……い……アク」

そう言っている間も、桂木の指先は茜の弱いところを攻めてくる。本当にこの男は最悪だと思っただ。

「やああ……！ い……」

そしてまた絶頂に押し上げられる寸前で動きを止められて、茜は苦しきのあまり本気で泣き声を上げた。

「や……も……おね……が……い」

呼吸を喘がせながら快楽に耐えていた茜は、桂木の首に腕を回して抱き付き、「くる……しい!!」と懇願する。吐き出す息が酷く熱かった。

「やりすぎたか……」

泣いて縋る茜を見下ろして桂木が呟いた。蜜を溢れさせた秘所から指を引き抜かれ、桂木の熱が擦り付けられる。それだけでもうたまらなかった。桂木の欲望を受け入れようと秘所がひくついで、自然と腰が前後に揺れる。

「ひっ、ん……んん」

数年ぶりの行為に不安はあったが、散々高まる寸前で快楽を逸らされてきた体は、思ったよりあっさりとして桂木を受け入れた。ゆっくりと押し開くように入ってくる桂木の動きに合わせて秘所が歓喜に轟く。秘所だけじゃなく、満たされる快楽に体中が震えて甘い叫び声上がる。

「あっ、ああん、いいっ……!!」

すべて受け入れることができたのか、いったん、桂木は動きを止めて茜を見下ろしてくる。

忘れていた満たされる喜びと、支配されることのわずかな痛みを思い出す。

覆いかぶさってくる男の顔に浮かぶ気遣いと情欲がなぜか愛おしくて、もっと強く触れたいと思った。思う心のままに、茜は桂木の大きな背中にしがみ付く。

「かつ、ら……ぎさん」

名前を呼べば、桂木が茜の髪を先ほどと同じように優しい手つきで梳いてくる。

「大丈夫か？」

茜は無言で頷いた。吐息が触れる距離にある男の瞳から、目が離せない。切れ長の男の瞳が潤み、眉を歪める様に、茜は桂木も感じているのだと知って、体だけではなく心も満たされる気がした。絡んだ視線を離さないまま桂木がゆっくりと近づいてきたので、茜は瞼を閉じた。

「……んう！」

口づけと一緒に緩やかな律動が始まった。最初は様子を窺うようにゆっくりと動いていたが、徐々に腰の動きは速くなっていく。

桂木が動くたびに生まれる悦楽に、茜は息を乱した。

「茜……」

名前を呼ばれた。体が熱く疼く。

苦しいのに気持ちよくて、甘いのに苦く感じた。相反する感覚が茜の体を乱す。

快楽と苦しみの狭間で、茜は自分を支配する圧倒的な質量と熱に、ただ溺れた。声を上げることができないほど揺さぶられて、体の奥まで突き上げられる。

「あ……や……イ……ッちゃ……う!!」

溺れるほどの快楽に、茜は必死で桂木の肩にしがみ付いた。

目の前が白く染まって、落ちると思った瞬間、桂木の力強い腕に背中を支えられた。

「くっ……茜……」

掠れた声で桂木が茜の名を呼んだ瞬間、二人は同時に果てた。

ずるりと抜け出されるときですら震えるほどに感じていた。

安っぽいホテルの部屋の中。二人の荒い息遣いが響く。互いの胸を合わせるように抱き合っ
横になる。

汗に濡れた体を互いに離すことができない。触れ合った場所が酷く熱かった。

息が上がって言葉にならないけれど、互いの瞳を見つめていけば言葉なんて必要ない気がした。今この瞬間の情欲に言葉なんて無意味だった。

息が乱れて酷く苦しいのに、桂木の唇が恋しくなる。キスがしたいと思った。ほんのわずかに首を動かせば触れられる距離にある男の唇が恋しくて仕方ない。

荒い呼吸を繰り返す男の唇に引き寄せられるように、今度は自分から口づける。触れた唇は少しだけかさついていた。そのかさつきを舌でなぞると、すぐに絡められる。あっさりと主導権を奪われて、甘い喘ぎがキスの合間に零れた。

燃るような情動が二人を支配していた。抑え切れず茜は再びしどけなく足を開いて、桂木を受け入れる。

『手加減は、なしだ……』と言った言葉通り、桂木は本当に容赦がなかった。

そのあとも、朝まで何度も何度も求められた。

何回したかなんて、記憶にない。

熱に浮かされ、求められるままに、ただ爛れた時間を二人で過ごした。

与えられるキスに、熱に、茜はただ翻弄され続けた。

* * *

二ヶ月前のあの時。なんで、せっかく眠りにつこうとした猛獣をわざわざ起こした、自分。完全

に酔っていたとしか思えない。

でも桂木が『その気がないならやめるか』と言って離れていこうとした時、どうしても我慢できなかった。

だから、離れていった桂木を挑発するような真似をした。

自慢じゃないが、二十九年の人生の中で、あんな風に男を挑発するような真似をしたことなんて、あとにも先にもない。

落ち込みどころが満載な出来事を思い出し、さらにどん底な気分になる。

そもそも普段の茜なら、一夜だけの関係なんて承知しなかった。そういうことを許容できる性格なら、いつまでも昔のトラウマを引きずって、五年も一人でなんていない。

本当にもうあの日の自分はどうかしていた。

きつと、大きな仕事の成功による興奮と、アルコール、何より桂木のキスに酔って、理性が働かなくなっていたのだろう。

だいたい桂木のキスは卑怯だ。あんな極上で甘いキス。私は知らない。

一瞬で、忘れていたはずの女としての本能が目覚めさせられた。

なんであんなにキスが上手なんだ、あの男は！ あれさえなければ、一夜の過ちなんて、馬鹿なことをせずに済んだ。

抱き締めていたクツションにぎゅうぎゅうと顔を押し付ける。

なんで、あの時、キスなんてしてきたのよ、桂木さん。

なんで、私を誘ったのだ。いつも喧嘩ばかりしている私を。

……なんで！　なんでちゃんと避妊しなかった!!　桂木のバカヤロー!!

抱き締めていたクッションを、怒りにまかせて床に叩きつける。

底辺まで沈んでいたはずの気分は、桂木に対する怒りに変わって一気に沸点にまで達した。

いくら酔ってたとはいえ、大人としての最低限のマナーは守れ!!

そして自分！　いくら久しぶりのセックスで、わけがわからなくなっていたとはいえ、相手がゴムをつけてるかぐらい確認しろよ！　なんで中に出されたことに気づかなかった!!

茜は桂木を信用していた。その辺の馬鹿な男たちとは違っていると思っていた。だから、桂木に体を預けたのに。

ぜえー。ぜえー。

ひとしきり暴れて、肩で息をしながら、茜は床に叩きつけたクッションの上に倒れこむ。

あのなんでもそつなくこなす桂木が、そんな危ない橋を渡るとは思えない。それだけ余裕がなかったということだろうか。

束の間、問題の夜を振り返って、それはないと思う。あれだけ人を翻弄してくれたのだ。余裕がなかったなんて言わせない。だったらどうしてと思わずにいられないが、その疑問に答えてくれる男はここにはいない。

また溜息が零れる。

わかっている。桂木に責任を転嫁しても、どうしようもない。

お互い、いい大人だ。酔っていたとはいっても合意の上での行為。つまり、責任はイーブン。でも、こうしてリスクを負うのはいつだって女なのだ。それだけで、女として生まれてきたことが不公平に思えてくる。

産むにしろ、産まないにしろ、このことはきつと茜の今後の人生を大きく変えるだろう。

茜の選択次第では、一つの命が生まれてくる前にこの世から消える。

そう思うと怖くて仕方なかった。縫う思いで形が変わるほどにクッションを抱き締める。

女としての崖つぶちの二十九歳の誕生日。茜は人生最大の岐路に立たされた。

本当にどうするよ、私？

考えても答えなんて出ない。

とりあえず、今日はもう寝よう。明日も仕事だ。

こんなところで妊娠検査薬と睨めっこしても、クッション相手に百面相していても、事態は何も変わらない。茜はのろのろと起き上がり、ベッドの上に倒れこんで瞼を閉じる。

これが夢なら……。ありえないと思っただけでも、そう願ってしまった。

もう男の人に振り回されるのはうんざりなのに……

五年前、茜には結婚を約束した恋人がいた。

相手は大学時代から付き合っていた岡野孝明おかのたかあきという男。茜が所属していた英語サークルの二つ年上の先輩だ。

サークルの副部長だった孝明は、茜を含めた新入生に、単位の取り方から、教授たちの特徴まで教えてくれる面倒見の良い男だった。ただのサークルの先輩から、憧れの先輩になるまで、時間がかからなかった。

孝明に想いを寄せる女子は多かった。だから、大学に入って初めての夏休みに孝明から二人で出かけようと誘われた時のことは今でも鮮明に覚えている。

ドキドキしながら出かけた映画。

初めはうまく話もできなかったが、その当時ヒットしていたアクション映画の面白さに緊張を忘れ、かなり話が弾んだ。そして、二度目のデートの約束をして、別れる。

夏休み中、何度か孝明とデートを重ね、徐々に彼と二人で過ごすことに慣れていった。

夏休み最後のデート。二人で海辺にドライブに行つた帰りのこと。

『……好きだ。付き合ってほしい』

そう告白された時には、茜は孝明のことが大好きになっていた。

だから、その告白に頷うなづいた。

付き合い始めは、サークル仲間に散々からかわれたが、孝明の人柄のためか、茜に対するやつかみはほとんどなかった。

勝気な茜と穏穏やかな孝明。性格は反対だったけど、それが良かったのか、二人の相性は良かった。互いの足りないものを補い合えるような関係だと思っていた。

孝明と一緒にいる時が、一番自分らしくいられた気がした。時々、喧嘩けんかをしながらも、茜と孝明は順調に付き合いを続け、二人の関係は社会人になっても変わらなかった。

そして、付き合い始めて五年目の夏。茜は孝明にプロポーズされた。

就職したばかりで、仕事が楽しくなってきたころだったから、正直そのプロポーズには困惑した。それに結婚なんてまだ早い……

そう俯うつむく茜に、結婚しても仕事を続けてもいいと孝明は言ってくれた。それに『仕事を頑張る茜が好きだから、茜が安心して帰れる場所になりたいし、俺の帰る場所になってほしい』という孝明の言葉が嬉しくて、茜は孝明のプロポーズを受け入れたのだ。

幸せだった。

たぶん、今までの人生で一番、幸せな時だった。

歯車が狂いだしたのは、いつだったのだろうか？

茜には七歳年下の妹がいる。

勝気な茜とは違って、人見知りで大人しかった満。

子供の頃は、どこに行く時もいつも茜の後ろをついて回るような子だった。それは満が高校生になっても変わらず、茜が就職して一人暮らしを始めてからも、よく一緒に買い物に行ったり、茜の部屋に遊びに来たりしていた。

茜は年の離れた妹が、かわいかった。

近所でも評判の仲良し姉妹だった茜と満。

男兄弟の中で育った孝明は昔から妹が欲しかったらしく、満をかわいがり、三人で一緒に出掛けることも多かった。

人見知りな満も、孝明にはよく懐いていた。

茜と孝明の結婚が決まった時、誰よりも祝福し、喜んでくれたのは満だった。それなのに……何が、いけなかったのだろうか？

いくら考えてもわからない。

自分の幸せに酔って、満の苦悩を見逃したから？

プロポーズされたという現実を胡坐をかいて、孝明の変化に目をつぶったから？

今さら後悔しても、何も変わらない。いくつもあつたはずの前兆を、仕事と結婚式の準備の忙しさを言い訳に、見なかったふりをしたのは茜だ。

前はよく三人で出かけていたのに、それを断るようになり、そして茜と孝明の結婚式が近づくと、満はげっそりと痩せ、笑わなくなった。

茜と一緒に結婚式の準備をしながらも、どこか上の空だった孝明。

徐々に増えていく違和感に気づきながらも、あの頃の茜はマリッジ・ブルーだと自分に言い聞かせて、現実から目を逸らしていた。

結果から言えば、茜は大好きで大切だった二人に裏切られた。それも最低最悪な形で。

まだ高校生だった満が、孝明の子を妊娠していた。

それを知ったのは結婚式の三ヶ月前。

八月の酷暑だった、土曜日の夕暮れ。一人暮らしの部屋に差す西日がやけにまがまがしい赤をしていたのを覚えている。

満と孝明は二人揃って現れた。なぜ、二人が一緒なのか疑問に思ったが、それよりも、しばらく見ない間にげっそりと痩せた満の姿に驚いた。

たぶん、十キロ近く落ちていたのではないだろうか。

もともと少しぼつちやりめで、笑うとえくぼができるかわいかった顔が、まるで幽鬼のように青白くなり頬がこけている。

そして、瞼は赤く腫れていて、孝明に連れられてきた時、満はずっと泣いていた。

両親から最近、満の様子がおかしいとは聞いていたが、まさかここまでとは思わず、何か悪い病気なのかと心配した。両親が聞いたとしても、食欲がないのは茜の結婚式でかわいいドレスを着る

ためにダイエットしているせいだ、と言いつ張つて本当のことを話してくれないから、一度話をしてほしいと言われていたのだ。

しかし、色々と忙しかつた茜は、なかなか満と会う時間を作ることができなかった。痩せ細つた満が泣き続ける様子を見て、茜は会わずにいたことを酷く後悔する。

何があつたのかと聞いても、満はただ泣き続けるばかりで、まともに答えてくれなかつた。

このままでは罫が明かれないと思い、満を連れてきた孝明なら何か事情を知っているのかと問おうとした時、突然孝明が土下座する。

何が起つたのかわからず、呆気にとられた茜に孝明が一言、言い放つた。

『……すまん、茜。結婚を……結婚を取りやめたい……』

絞り出すように告げられた孝明の言葉に、茜は目を見開く。そして、その瞬間、満の嗚咽が激しくなつた。

『……ど……う……い……う……こと？』

事態が理解できずに、震える声で茜は聞いた。酷く憔悴して泣きながらこの場にいる満と、突然結婚をやめたいと言いつ出した孝明。

嫌な予感がした。酷く嫌な予感が。

孝明がこの先に言うであろう言葉を聞きたくなかつた。聞いてはいけな気がした。

真夏なのに鳥肌が立つほどに寒くて仕方なくて、思わず自分で自分を抱き締める。

聞きたくない。何も聞きたくないと思つた。だけど。

『満が……満が妊娠している。俺の子だ……』

次に孝明が放つた一言に、茜の世界は崩壊した。

目の前が黒く染まり、酷い耳鳴りがした。体がガタガタと震えて立つていられず、茜は思わずその場にへたり込む。

『ご……め……ひつく……な……い……い……お……ね……ちや……ご……め……な……い……い……』

『違う……悪いのは俺なんだ。全部、俺なんだ……満を責めないでやってくれ……』

泣きながら謝り続ける満と、それを庇う自分の婚約者。

悪夢だと思つたかつた。何もかもが悪夢だと思つたかつた。

しかし、すべては現実。

それから、茜は自分がどうしたのかあまり覚えていない。泣きながら孝明と満を罵つた気もするし、茫然と座り込んでいた気もする。

ただ、憔悴しきつて痩せ細つた満をこのままにしておくわけにはいかず、孝明と二人で病院に連れて行つたことだけは覚えている。

そして、診察の結果、やっぱり満は妊娠していた。しかも、妊娠しているのに、食事もとれないほどにやつれてしまったために、子供は週数にしては育成状況が悪いという。

満はそのまま入院することになった。手続きをしている間も満は、ずっと泣きながら茜に謝り続けていた。

そのあと、急遽、両家の親を呼び出して、今後についての話し合いが行われた。

その場でも、孝明は土下座して、悪いのは自分だと言い続けたと記憶している。茜の父親に殴られても、自分の母親に罵られても、一切反論することなく謝罪し続け、満との結婚を望んだ。

周りにどんなに責められ、非難されても孝明の決心は変わらず、彼は満を庇い続ける。そして、それは満も同じだった。

あの泣き虫で、大人しかった満が、周りの非難に耐え、孝明は悪くないと言いつづけたのだ。互いを庇い合う二人を、茜はどこか他人事のように眺めていた。

たぶん感情が麻痺していて、何も考えられなかったのだろう。

いつから、二人がそんな関係だったのか、どうしてこんなことになったのかわからない。聞きたくもなかったし、知りたくもない。

孝明は一切言い訳をせず、ただ、茜に謝罪し続けた。

真面目で優しく、嘘がつけない孝明が好きだった。

だけど、こんなことになっても言い訳一つせず、満を守ろうとする孝明が恨めしい。

そして、そのことに、茜は孝明の覚悟を感じた。茜の知る孝明は、穏やかさの中に一本筋の通った強さを持った人間だった。一度こうと決めたら、それをやりぬくためにはどんな努力も惜しまない。

誠実で優しくて、人を傷つけることを嫌悪していた孝明。

その孝明が、周囲の人間を、茜を傷つけても、満との結婚を決めたのだ。

もうだめだと思った。

茜一人がどんなに嫌だと泣き喚いたところで、きっと孝明の決意は変わらない。それがわかった瞬間、茜はすべてを諦めた。

茜が孝明との婚約破棄に同意したことで、修羅場と化していた両家の話し合いは、一応の収束を迎える。実際は、満と子供のことがあり、揉めている時間がなかったというのが正しいのかもしれない。けじめとして、茜には婚約破棄の代償として孝明から慰謝料が支払われ、長く続いた春は終わりを告げた。

その年の暮れ、満は無事に元気な男の子を出産し、孝明と結婚した。

あれから、五年。まるで嫌な現実から逃げないように茜は仕事に没頭し、すべてを忘れることを選んだ。

おかげで、仕事ではある程度の成功を収めることができた。

この先も仕事一筋でずっと一人で生きていこう。

誰よりも身近で、誰よりも大切だった二人の裏切りは、茜の心をぼろぼろに傷つけ、恋や愛に対して酷く臆病にした。

孝明と別れたあと、誰とも付き合わなかったわけではない。

荒んだ気持ちのまま、夜の街で馬鹿な真似をしていた時期もあったが、節操なく誰とでも寝られるような性格ではなかったから、すぐにばかばかしくなっただけでやめた。

この人なら好きになれるだろうか、と思える人もいたが、また裏切られるのではないかという思いに駆られ、どうしても最後の一步が踏み出せない。

もう傷付くのが怖かった。また誰かを好きになって裏切られるのが酷く怖かった。

一度味わった苦い経験と喪失感、茜の中に根深いトラウマを植え付けていたのだ。だから、もう二度と誰かと深く関わるつもりなんてなかったのに。

* * *

どんなに嫌なことがあつて、朝なんて来なければいいと思つても、茜の意思など無視して、朝はやつてくる。

目覚ましなんてなくても、長年の習慣で六時になったら嫌でも目が覚める。

寝不足で頭がぼんやりとしていた。まだ温かい布団から出るのが億劫な冬の朝。寒さに震えながらヒーターの電源を入れる。

当たり前だけど朝起きてても、やっぱり現実は何一つ変わっていなかった。

ガラステーブルの上に放置したままの妊娠検査薬は、変わらずに陽性反応を示していて、現実を茜に知らしめた。

昨日の夜から癖になつている溜息が零れる。

とりあえず出勤準備をするために、茜は重い体を引きずつて洗面所に向かう。

「ひどい顔」

鏡の中に映る自分の顔に、思わず笑い出したくなる。寝不足で目の下にうっすらと浮かんだ隈に、むくんだ顔。鏡の中では疲れた顔をした女が乾いた笑みを浮かべていた。

もう自分は若くないと自覚する。二十代の前半は、多少夜更かししても、平気だった。こんな風に隈が浮かぶことも、顔がむくむこともなかったと思う。最近は肌も張りがなくなり、寝不足だと化粧のりが悪くなった。

それも仕方ないかと思う。今日でもう二十九歳。色々と努力はしているが、衰えていくものがあるのは仕方ない。若いころの肌の張りを取り戻せないのなら、それに合わせて化粧の仕方を変えるだけと開き直つてやる。

ばしゃん!!

鏡の中で不景気な顔をしている女の顔に、水をぶっかけて気持ちを切り替える。

子どものことは、今、悩んだところで結論なんて出ないに決まつてる。だったら、出勤前のこの忙しい時間に悩むのは時間の無駄だ。

今日も、仕事は詰まっている。立ち止まつてる時間なんて茜にはない。

今週、早く仕事を切り上げられる日に、産婦人科に行つてちゃんと診察を受けようと決める。

考えるのはそれからでも、遅くないはずだ。

気持ちを引き締めるために、わざと冷たい水でバシャバシャと顔を洗う。
残っていた眠気とだるさがふき飛ば気がした。

それからいつもの手順で簡単に朝食を食べ、経済面を中心にじっくりと新聞に目を通し、化粧をして、スーツを身にまとった。

その頃には、平常心が戻ってきている気がした。

部屋を出る前に鏡で確認したら、いつもの強気な営業ウーマンの顔をしていた。そのことに茜は少しだけほっとした。

普段通り始業時間の三十分前に会社に着くように家を出る。朝の拷問ごうもんのような満員電車には辟易へきえきするが、社会人になって七年以上経たつと慣れたもの。近づく副都心の光景を電車の窓から眺めながら、会社の最寄駅で降りる。

そこにあるのは普段と変わらない風景だった。

出社するとロッカールームに寄り、営業二課の自分のデスクに向かう。

「おはようございます」

「……おはようございます」

「おはよう！」

途中、同僚たちと朝の挨拶を交わす。昨日片付けて帰ったはずのデスクの上にはもういくつもの書類やメモが置いてある。

鞆を机の中に入れてしまうと、仕事の優先順位を考えながら、パソコンの電源を入れてメールのチェックを行う。

途中、ちらりと斜め前の桂木の席を見るが、その席はここ二週間空席のまま。

茜の人生最大の悩み事の原因を作ってくれた男は現在、次回プロジェクトの市場調査のために、遠い中国の空の下にいる。

帰国は三日後の予定。それが今の茜にとっていいことなのか、悪いことなのかかわからず、複雑な心境に駆られた。

桂木に相談するべきなのか。

あれは酔った勢いの一夜の過あやまち。それで妊娠したから責任とって結婚しろなんて言うつもりは、さらさらない。だけど桂木が何を思っあやまつて、あの夜に茜を抱いたのかわからないから、どうすればいいのかわからない。

互いに大きな仕事の成功と、酒に酔って興奮していた。それだけのこと。

そこに感情はなかったはずだ。あの夜のあとも、桂木は何一つ変わらなかった。

いつもどおり淡々と仕事をこなし、茜に対する態度も普段通り。あの夜のことを匂わせることは何一つなかった。

茜はそのことに大きな安堵あんどとほんの少しの落胆らくたんを覚えた。

別に態度を変えていてほしいなんて、思っているわけじゃなかった。むしろ、変わらないでいてくれてありがたかったのだが……

また、溜息が出そうになるが、寸前でこらえる。

だめだ。今は仕事に集中しよう。仕事に集中していれば、余計なことを考えなくて済む。

「おはようございます！ 茜先輩！」

そして、茜が午前中の打ち合わせの資料の用意をしていると、ハイテンションな声が聞こえた。隣のデスクの三歳年下の後輩、間山康貴が出勤してきたのだ。

「茜先輩！ 大変です！ スクープです！ 営業二課の一大事です！」

席に着くなり、いきなり椅子を近づけてきて話しかけてくる間山は、茜が教育係を務めた後輩。仕事はそこそこできるのに、それよりも社内の噂話を収集するのが趣味という困った性格をしている。

間山の握っている情報は多岐にわたっていて、使い方次第では、社内の勢力図が一変する可能性がある。本人は情報を収集するだけして、それを生かすことに興味はないらしい。その情熱の十分の一でも仕事に回してくれと、茜は思わずにはいられない。

「おはよう。朝から一体何？ くだらない話に付き合うつもりはないわよ」

朝から妙にテンションの高い間山に頭痛を覚えながら、近づいてくる彼の顔を思いつき押しつける。

「いてっ。酷いな茜先輩。本当に一大事だから、いの一先に先輩に報告しようと思ったのに。今回は本当に特ダネなんですよ！ しかもうちの営業二課にとっても、一大事です!!」

「はいはい。で、何？」

この調子では間山は一度話を聞かない限り落ち着かないだろう。茜は溜息をついて聞いてやることにした。その言葉に、間山の目がきらきらと輝きます。

ゴシップ収集に命をかける二十六歳男子ってどうよ？ 頭を抱えたくなる。

せっかく押しつけたのに、間山はまたぐぐつと近づいてきて小声で話し出す。

「桂木課長が」

その名前を聞いただけで心が動く。

「桂木課長が、結婚するらしいんですよ！ しかも、相手は次期支社長と評判の鳥飼部長の二十二歳のお嬢さん!!」

間山の衝撃発言に、思わず桂木の席を見た。無言のまま二、三秒桂木の席を凝視して、無言のままゆっくりと視線を元に戻す。

目の前には、瞳をきらきらと輝かせた間山の顔。ほめてほめて、と犬だったら尻尾をぶんぶん振つていそうな表情だ。

茜はふいに、すぐ傍にあった間山の額を手の平で思いつきりはたいた。

「間山！ 近い！」

「ついでー!!」

情けない叫び声を上げながら、間山が額を押さえて後ずさる。

「……茜先輩！ 何するんですか!? せっかく特ダネを教えてあげたのに!!」

「誰も頼んでない!! それに桂木さんの結婚のどこが、うちの課の一大事なのよ？ あの人もいい

年なんだから、そんな話の一つや二つあってもおかしくないでしょう！」
痛みに叫ぶ間山を怒鳴りつけ、それからしみじみと咬く。

「まあ、あの人がそういう社内政治に興味があったことには驚きだけどね」

あの男、そんなもんに興味があったのか？

桂木の結婚より、ある意味そっちの方が衝撃だった。

完全実力主義であるこの会社では、縁故での出世などありえない。けれど、派閥ができ上がるのはある程度は仕方がない。実際、次期日本支社長を巡って、企画開発部の鳥飼部長と人事部の的場部長が競い合っているのは、社内では公然の秘密である。

桂木は実力でのし上がっていくタイプだと思っていた。誰かの下について出世を考えるような人間とは思えない。

普段の桂木は、社内の勢力図なんて興味がないと言わんばかりに、実に淡々と自分の仕事をこなしている。

だから、桂木が鳥飼部長のお嬢さんと結婚して、その傘下に入ると決めたのは意外だった。

だいたい、あの男は誰かの下について、大人しくいいなりになるような男じゃない。

下手に首輪をつけようとしたら、噛みつかれるだろう。

諸刃の剣になりかねない男を、よくも抱え込む気になったなど、ある意味、鳥飼部長には感心する。

「ですよね！ ですよね！ あの中立派の桂木課長が、ついに鳥飼部長の傘下に入ることにし

たんですよ！ これをスクープと言わず、何をスクープと言うんですか！ 営業二課の一大事でしょ!!」

間山は懲りずに、また近づいてくる。

茜は間山の目の前に手を突き出してそれを制する。茜の手のひらを見て、先ほどの額への衝撃を思い出したのか、間山が少しだけ後ろに下がった。

茜は周囲には聞こえないように小声で問いかける。

「確かにスクープだけど、どこが営業二課の一大事なのよ？ たとえ、あの人が鳥飼部長のお嬢様と結婚したとしても、あの人はそれを仕事を事に持ち込むような人じゃないでしょ！」

茜の言葉に納得したのか、間山はボンと膝でも打ちそうな表情で頷いた。

それを呆れ交じりに見つめ、茜は自分の仕事に戻ろうとデスクに向かう。

まあ、ある意味、桂木の結婚は茜にとっては一大事であるが。

今年の誕生日は厄日なの？

なんでもこうも頭が痛くなるようなことが立て続けに起こるのだ。

頭を抱えて、溜息をつきたくなる。

ただでさえ、妊娠などという一人で抱えるには重すぎる事実が発覚したばかりなのに。

相手の男が、自分とは別の女と結婚するなんて。

一体、私にどうしろと？

あの桂木が結婚を決めたということは、派閥など関係なくそのお嬢さんに惹かれたということだ

ろう。

だったら、なんであの夜、桂木は自分を抱いたのだ？ やっぱ桂木も相当酔っていたとか？

思わず自分のまだべったんこのお腹を見つめる。

どうするよ？ 本当に。

物思いに耽りそうになった時、いつのまにか再び近づいてきた間山が話しかけてくる。

「茜先輩！ これはチャンスですよ！」

なぜか今まで以上に目をキラキラさせて興奮している様子だった。今度は一体なんだ。

「茜先輩が営業二課を、いやこの日本支社を乗っ取るチャンスですよ!!」

「はあ〜？」

間山の突拍子もない発言に、茜の物思いも吹き飛ばす。

この後輩は、突然何を言い出すのだ？

啞然とする茜にかまわず、間山がまくしたてるように話し出す。

「もし桂木課長が鳥飼派につくのなら、社内勢力の均衡が一気に崩れて、的場派が潰れます。鳥飼派の天下になったら、茜先輩の出番です！ 俺が持つてるゴシップを使えば、茜先輩が桂木課長をぎゃふんと言わせることも可能です！ もし、ゴシップがなければ、俺がいくらでも作り出しますから!!」

なんだかとても不穏な言葉が混じっている間山の言葉に、眉間に皺が寄る。

こいつ、自分が持つてる情報がどんなもんなのか、一応の自覚はあったのね。そして、その使道もわかっていたのか。集めることだけに、命をかけているのかと思つた。

「茜先輩のためなら、協力は惜しみませんよ！ だから俺と茜先輩で日本支社を乗っ取りましょう!!」

妙な熱のこもった言葉とともに、間山は茜の両手を握る。

間山の勢いについ妄想が膨らむ。桂木と鳥飼部長、的場部長を踏みつけに高笑いして、支社長室にいる自分と、その背後で忠犬のように尻尾を振っている間山。

いいかもしれないと考えて、ハッと我に返る。

違う、違う。今のなし!! 私が欲しいのは実力で積み上げたキャリアであつて、後ろ暗い陰謀の果ての権力じゃない。

ぶるぶると首を振って、おかしな妄想と同時に間山の手を振り払う。

「馬鹿なことばかり言つてないで、さつさと仕事しなさい!!」

朝から余計な衝撃を与え妄想をさせてくれた間山を、半ば八つ当たりで怒鳴りつけ、その脳天に空手チョップをおみまいする。

「っで——!!」

茜の容赦のない一撃に、間山が後ろにひっくり返つて悶絶しているが、そんなものは放置だ。

あく危なかった。間山の妙な熱意に引きずられて、危うくおかしな道を突き進むところだった。

もう一度頭を振って、今度こそ仕事に戻ろうとすると、向かいのデスクの同期の田中健吾と目が

合う。

「なんだもう終わりか？ 間山とのどつき漫才」

「どつき漫才なんてした記憶はないわよ」

にやにやと笑う田中に、茜は溜息をついて答える。

「どころで……」

田中が急に声を潜めて声をかけてきた。

「真崎が間山を使って、日本支社を乗っ取る気なら、俺も手を貸すぞ？」

にやりと笑う田中に、茜は酷い眩暈を覚えそうになる。

あんな話を本気でとる奴がいるなんて。

「そんな物騒なことをするつもりはないわよ。上に上がりたかったら、私は実力でのし上がるわよ」

「さっすが真崎。男前だね。惚れそうだよ」

口笛でも吹きそうな口調で田中が言った。

「はいはい。ありがとう」

田中の軽口に茜が疲れた顔で答えると、彼は急に真顔になる。

「もし、桂木さんが縁故でのし上がるなんてくだらないことをしたら、俺が叩きつぶしてやるよ」

そんな物騒な宣言はいりません。田中はやると言ったら本当にやる男だ。出世にも権力にも興

味がなから普段は呑気なものだが、この同期が本気になったら、どんな汚い手でも平気で使うだろう。

「桂木さんが結婚するっていうことは、それは相手のことを本気で思ってるってことでしょう。派閥なんて気にしてないわよ」

って、なんで私が桂木さんを庇わないといけないのだ！ そんな筋合いはこれっぽっちもない。

むしろ、桂木さんを叩きつぶしたいのは私だ！！

人に手を出しておいて、自分は派閥のボスの娘と結婚ってどういうことだ！！ ……なんか、ものすごいむかついてきた。

間山からもたらされた衝撃のスクープと余計な妄想で麻痺していた感情が動き出す。

あの鉄仮面男、どうしてくれようか。

「それもそうだな。だが、おまえはそれでいいのか？ 桂木さんが本当に結婚しても？」

怒りに燃えていた茜は、田中の問いかけにぎくりとした。

「どういう意味？」

まさか、知っているのだろうか？ 桂木と自分の事を。そんなはずはないと思うが、何もかも見

透かしているような田中に、内心の動揺を悟られないよう、営業で鍛え上げた作り笑いで答える。

「わからなければいい。もう始業時間を過ぎてている。いい加減仕事するか」

追及されなくてホッとしたが、田中には何もかもばれている気がして、なんだか落ち着かない。

疲れた溜息をつきながら、茜は中断していたメールチェックに戻る。その中に、今、最も茜を悩

ませ、腹立たせている男からのメールを発見する。

今は遠い中国の空の下にいる鉄仮面男の無駄に端整な顔を思い出しつつ、仕事の指示だけが書かれたメールの文面を睨み付ける。

確かにあれは酔った勢いの一夜の過ちだった。桂木とは付き合っているわけじゃない。

あのあと桂木は何も変わらなかった。変わらないことを、茜も望んだ。

互いに合意の上だった以上、桂木の結婚を責めるのは筋違いだとわかっている。

それでも、今、このタイミングで発覚した桂木の結婚に腹が立つのは仕方ないと思いたい。

——しかし、よくも人のトラウマを踏みつけてくれたな！ 二十二歳のお嬢様と政略結婚ってどういうことだ!! 本当に、この男とは合わないと思った。とことん相性が悪いのだろう。

桂木の結婚が出世を狙ったただの政略結婚なら、自分は実力で桂木を超えてやる！ いつか絶対、仕事であの鉄仮面を引っぺがしてやる!!

一度地獄を見た女を舐めるなよ!! と自分を鼓舞する一方で、もう桂木に妊娠を相談できないことに気づき、長い溜息が零れた。

本当に、どうするよ？

桂木の帰国まであと三日。

* * *

妊娠の判明と桂木の結婚という波乱から始まった一日も、なんとか無事に終わろうとしていた。長引いた商談のせいで肩が凝り、茜は首を回しながらロッカールームに向かう。

今日は本当に疲れた。やっぱり歳なのかな。今日で二十九歳。もう二十九なのか、まだ二十九なのか。

学生の頃、想像していた二十九歳の自分はもっと大人だと思っていたけど、実際はずいぶん想像とはかけ離れている。

溜息をつくたびに、心も体も重くなっていく気がするの、やっぱり歳のせいなのか。責任や立場がある分、昔よりどんどん身動きが取れなくなっていく。

仕事をしている間は忘れていられた現実が、一人になると重く押し掛かる。

今朝、悩むのは病院で診察してもらってからにすると決めたはずなのに……

腹を立てていられるうちはよかった。だが、桂木の結婚という衝撃は、時間の経過とともにじわじわと茜にダメージを与えてきた。

桂木が結婚するというのがなら、自分はどうすればいいのだろう？

無意識にまだ平たい自分の下腹部に触れる。

五年前の出来事と重なる状況に、気が滅入ってくる。

あの時とは立場が逆転しているが、あまりにも似た状況にどうしたらいいのかわからない。

満は、あの子は、あの時に何を思っていたのだろう？

孝明の子供を妊娠していたあの子は、自分に告白するまで、どんな葛藤を抱えていたのだろうか？あの時と何もかもが同じ状況ではないが、思わずそんなことを考えてしまうほど、今の茜は出口のない迷路の中にいる気分だった。

五年前の満と孝明は少なくとも愛し合っていた。でも、桂木と茜は違う。二ヶ月前のあの時、茜と桂木の間に恋愛感情はなかった。二人を突き動かしていたのは、凶暴なまでに純粹な衝動だった。

普段は喧嘩ばかりの上司の中に見つけた雄としての顔に、あの時、茜は強烈に惹かれた。この男に触れてみたいと衝動のままに茜はその身を桂木に任せた。

あの時の桂木が何を考えていたのか、茜にはわからない。

婚約者がいるくせに、茜に手を出したというのなら、桂木もしよせんはただの男だったということか。

ただ、重ならないのだ。普段の茜が知る桂木と、不誠実な姿を見せた男の顔が。

茜だって、桂木のすべてを知ってるわけじゃない。知らないことの方が多いだろう。それでも、五年以上、一緒に働いてきた。

その中で見てきた桂木は、婚約者がいるのに、浮気するような不誠実な男でも、出世のために政略結婚を考えるような男でもなかった。

茜とは合わない部分も多く、喧嘩なんて日常茶飯事ではあったが、本気で嫌っているわけではない。

桂木の仕事に対する熱意や真剣さ、上司や部下に対する飾らない誠実さを知っているからこそ、茜は困惑せずにはいられない。

あの桂木が結婚を決めたということは、それだけ相手に対して真剣な思いを抱いているのだ。きつと、周囲の思惑なんて、気にもしていないだろう。

そつと触れる自分の下腹部は、やっぱりまだ平らで、ここに命が宿っている実感はほとんどない。それでも、ここには桂木と茜の子がいる。小さな命が育まれつつある。でも、この子の存在は、桂木の婚約者と桂木本人の幸せを破壊するものだ。

私には自分の幸せのために、誰かの幸せを壊すことなんてできない。

五年前のあの時みたいな思いをするのは自分だけで、十分だ。あんな、最低最悪な思いは。衝動的な快楽を求めたツケを払うのは自分であって、決してまだ若い桂木の婚約者であってはならない。

それだけは、絶対に間違えてはいけない。

全く、桂木はなんだってこうも見事に茜のトラウマに触れてくるのか。

もう癖になってしまった溜息が零れた。

「な〜に、辛気臭い溜息ついてるのよ？ せつかくの誕生日でしょうが！」

後ろから声をかけられる。

驚いて振り向くと、同期の園田美紀が艶やかな微笑みを浮かべて立っていた。さばさばした姉御肌の美紀とは入社した時から意気投合し、プライベートのこともなんでも話し合える間柄だった。

女性社員の花形部署である秘書課に勤務するだけあって、美紀は美人だ。綺麗にまとめられた栗色の髪に、目鼻立ちのくっきりとした顔立ちをした親友は、社内の男性陣の憧れの的だった。ただ、美紀には長く片思いをしている相手がいる。そのため、酷くモテるくせに茜同様男の気配はなかった。

「……美紀。お疲れ」

「お疲れ。で、せっかくの誕生日にどうして辛気臭い溜息をついてたのよ？」

このもやもやを美紀に話してすっきりしたかったが、自分の中でも整理できないことを相談することはできそうになかった。

「ん〜。午後の商談がちよっと長引いたからね。疲れてるのかも」

そう言い訳すると美紀はつかつかと歩み寄り、茜の顔を両手で挟み込んで覗き込んできた。

「ちよ、美紀！ 何？」

「コンシールで誤魔化してるけど、目の下に隈ができてるわよ？ 顔色も悪いし、肌も荒れてる。

目も軽く充血してるし、寝不足ね。悩みは仕事じゃないとみた」

あまりの鋭さに、なんとさえばいいのかわからなくなる。

今はまだ美紀にも言えない。

困っている茜を見て、美紀が妹を心配する姉のような表情で笑う。

「今は言いたくない類の悩み？ だったら、無理には聞かないわ。ただ、しけた顔して溜息つくのはやめなさい。幸せが逃げるわよ？」

大人な対応をしてくれる親友の態度に、ホッとする。何かあった時に親身に心配してくれる人がいることが嬉しかった。

「そうね」

「そうよ。だから、飲みに行こう？ せっかくの誕生日じゃない。お祝いしてあげる」

「つて、美紀が飲みに行きたいだけじゃないの？」

美紀の言葉に茜は苦笑した。誕生日なんて、きつとただの口実だろう。この綺麗な親友は顔に似合わず酒豪なのだ。

「そうとも言うわね。でも、茜の誕生日を祝う気持ちはあるわよ？」

「はいはい。ありがとう。つていうかその顔で大酒飲みってどうなのよ？」

「顔を酒を飲むわけじゃないもの！ 今日奢ってあげるから、美味しいお酒を飲みに行こ！」
うきうきとしながら腕を組んできた美紀に引つ張られるように、茜はロッカールームをあとにする。

一人で悩むよりはこの親友と憂き晴らしに行くほうが、有意義な時間を過ごせるだろう。どんなに悩んでも、こればかりは簡単に答えは出せないし、出してはいけなと思った。

ロビーで田中と間山に出会い、四人でいつもの居酒屋で飲み始める。

「それでは茜の二十九歳の誕生日を祝って、かんぱーい!!」

「おめでとございます!!」

「おめでと」

「ありがとう」

美紀が音頭を取り、生ビールのジョッキ四つがカチンと音を立てる。

会社から徒歩で十分ほどの場所にあるこの居酒屋は、料理も酒もそこそ美味しく、値段も財布に優しいため、入社した時から茜たちの行きつけになっていた。

それぞれ好きなものを頼み、近況など他愛ない話で盛り上がる。

「あれ？ 茜、全然、飲んでないじゃない？ どうしたの？」

美紀が最初の一杯に口をつけただけの茜のジョッキに気づいて、声をかけてくる。

「明日も朝から、商談があるのよ。酒臭い息で行くわけにいかないからね。今日は我慢」

一応、妊娠中なのでお酒を飲むのはまずい。

「せっかくの誕生日なのに。それに今日は奢りよ？」

「ありがとう。気持ちだけで充分よ。その分、ご飯はしっかり食べさせてもらおうわ」

笑いながら茜が言うと、美紀は「そう？」と言って、無理に酒を勧めてくることはなかった。

「そういえば、最近、鳥飼部長がやたらとご機嫌なんだけど、間山何か情報持ってる？」

美紀は秘書課勤務のため、様々な部署と繋がりを持っている。そんな彼女が突然思い出したように言った。美紀の言葉に、待つてましたとばかりに間山の瞳が輝き出した。茜はせっかく忘れていた悩みを思い出してしまい、内心溜息をつく。

今日は、この話題から逃げることはできそうにない。

「よくぞ聞いてくれました、美紀さん！ 聞いてください!! この間山、とっておきの情報を掴んでるんですよ!!」

間山が、桂木が鳥飼部長のお嬢さんと結婚して、鳥飼部長の派閥に入るかもしれないという今朝の話題を喋り出す。

それを聞き流しながら、茜は目の前の酢豚に無言で箸を伸ばした。

「あの桂木さんが？ なんか意外。間山、それ本当なの？ ガセじゃなくて？ どう考えてもあの派閥とかに属するタイプじゃないでしょ？」

「本当ですよ！ なんでも三ヶ月前のとあるパーティーに参加していた鳥飼部長のお嬢さんが酔っ払いに絡まれていたのを、桂木さんが助けたらしいんですよ！ それで、お嬢さんが桂木課長に一目惚れ！ あの人はどこの誰だろうと必死で調べたら、自分の父親が勤める会社の人間ってことで、これは運命とばかりに父親に桂木課長との縁談を進めてほしいとお願い。もともと桂木課長を自分の派閥に取り込みたかった鳥飼部長は、愛娘のお願いに一も二もなく了承して、桂木さんが中国出張に行く前にお見合いの場をセッティング。場所は二人が運命の出会いを果たしたパーティーが行われた春光ホテル！」

間山は水を得た魚のように身振り手振りを交えて話す。

本当にこいつはどこでこんな情報を仕入れてくるのやら。

間山がまるで見てきたように語るので、茜も思わず桂木の恋愛話に耳を傾ける。

中国出張前にお見合いしたのなら、あの時桂木に婚約者はいなかった。気持ちが少しだけ楽に

なる。

お嬢様と自分は、天秤にかけられたわけじゃないらしい。

だが、続く間山の話に茜の気持ちはさらに沈められる。

「ふーん。それで出世に目が眩んだ桂木さんが、そのお嬢様との結婚を了解したの？」

「そこ！そこなんですよ！美紀さん!! 実は桂木課長も三ヶ月前に助けた可憐なコンパニオンに一目惚れしてたらしいんですよ！嫌々付き合いで行ったお見合い現場に、そのコンパニオンがいた！この機会は逃せないと、桂木課長も、このお見合いを了解!! 二人は運命の恋に向かつて走りだした！」

「あら、それは素敵ね！お嬢様と鉄仮面の運命の恋か〜」

「う〜。いいですよね！可憐な美少女を悪漢から救う騎士!!王道だ〜!」

意外に乙女なところのある美紀が、目をキラキラさせて間山と盛り上がる。

運命の恋ね。だったら、なんで私に手を出したのだ？

もう会えないと思つた運命の相手の身代わりにされたのか？

一瞬で運命を感じるほどに、そのお嬢様に一目惚れをしたのなら、私に手なんて出してんじゃないわよ。

桂木さんのバーカ。

ぽつりと胸のうちで呟く。

胸が痛む気がするのはきつと気のせい。

2

慌ただしく日々は過ぎ、気づけば金曜日を迎えていた。今日、桂木が長かった中国出張から帰ってくる。

正直、どんな顔をして桂木と会えばいいのかわからなかった。

病院にはまだ行つてない。正確に言えば行けなかった。

行く時間は作ろうと思えば作れたが、はっきりさせるのが怖かったのだ。

病院できちんと診察を受けて、妊娠を告げられてしまったら、もう逃げることはできない。そう思うと時間がないのはわかっていたが、勇気が出なかった。

うじうじと悩むのは性に合わないのに、いつまでも決断を下せない自分が嫌になる。いつそのこと桂木にすべてを打ち明けて相談してみようかとも思った。

あの男なら、問答無用で中絶しろとか、自分の子供じゃないなんて言つて責任逃れをすることはないだろう。認知なり、慰謝料なり、こちらが望んだ対応してくれることはわかっている。でも、それで傷付くのは茜ではなく、何も知らない桂木の婚約者だと思つと、できなかつた。どんな結果